

答：久保田

そのような状況を踏まえ、ここ2、3年、オーストラリアの小学校の先生を集めた研修を実施している。また、高等教育の先生と中等教育の先生を分けて教授法の授業を別々に行なう、というようなこともやっている。実際にアメリカン・スクールで教えている先生に来てもらい、実践的な活動を通した研修も行なっている。

案内：野山

最近、国際交流基金の方で、年少者のための日本語教材作りのためのリソースをカセットテープ付きで作ったが、これは世界的に画期的なことで、どう加工してもよいというふうに宣言してあるので、世界中で使うことができる。ホームページも掲載しており、必要ならば送るということも言っている。これをどう使うか、という話をしに行ってもいいという気持ちだが、先生方に起こるのではないか、というぐらい充実したものだ。地域の問題に関連して言うと、文化庁は、去年から、地域で著作権フリーで使える教材作りを目指しており、来年以降、できればデジタル化したものとして出していきたいと思っている。

案内：佐々木

7月24, 25日に国立国語研究所でシンポジウムを行なう。24日は国立国語研究所の講堂で、日系ブラジル人のバイリンガリズムというテーマのもと、いくつかの発表とフロアとの討議を行なう。このほか、年少者に対する国語教育（佐々木氏も発表）、国外にいる日系ブラジル人子弟の日本語、およびポルトガル語能力に関する研究がある。25日は代々木のオリンピックセンターでバイリンガリズムというテーマで行なわれる。

司会：長友

第二言語習得研究に関して言うと、教室で学習可能なものと外での自然な習得で可能なものとの違いというものがわかっていない。それを明らかにするために基礎研究を行なわなければならないと思っている。

## 司会者のまとめ

長友 和彦

21世紀を直前にして、今後の日本語教育とその研究のあり方を長期的かつ広い視野に立って討論できることを願って、「ポスト2000年」という表現を用いた。

この分科会では、“日本語教育の研究者・専門職業人養成機関”でもある「お茶大大学院人間文化研究科」の院生・石橋玲子氏、“外国人日本語教師研修”を一つの柱としている「国際交流基金日本語国際センター」の久保田美子氏、“国の日本語教育施策推進機関”の中核と言える「文化庁」の野山広氏に、それぞれの立場で、どのような日本語教育を目指して、現在何と取り組んでいるのかということについて、お話し願った後、フロアの参加者も含めた自由討論・質疑応答を行った。

それぞれのお話に先立ち、司会の私は次のような問いかけを行った。

(i)今後の国内外の日本語教育・研究の核となることが期待される（お茶大）大学院生は、今どのような研究と取り組んでいるのか。

(ii)海外、特に近隣諸国で、緊急の課題になっていると言われる現地の日本語教師養成・研修に対して、日本語国際センターはどのような教師研修の形と内容で対応しようとしているのか。

(iii)文化庁が今年の3月に公表した『今後の日本語教育施策の推進について』という調査研究報告は、今後の日本語教育に関する国としての路線を示したものと言えるが、具体的にはどのような日本語教育を目指したものなのか。

この三者（機関）がそれぞれに取り組んでいるのは、日本語教育という同じ事象である。同じ事象に関わり、それぞれに重要な役割を担っている者（機関）同士の連携、情報交流のネットワークはあってしかるべきであるが、この三者間に組織的ネットワークはない。小さくても、その連携、ネットワーク作りの一歩になること、それがこの分科会の目指すところであった。果たして、その目的は達成されたのであろうか。

ここに所収されている上記三人の方の発表内容が示しているように、それぞれが取り組んでいるものは極めて具体的なものばかりであり、かつ多彩で幅広い。その内容は、司会の私の投げかけた問いかけにも十分答えていると言えよう。しかし、発表に続く自由討論・質疑応答の大部分が、具体的な事柄についての正確な情報を得るためのやりとりに終始したことから推測すると、多彩で幅広い日本語教育が展開されていることは何となく分かっているが、私どもの多くは、まだその正確な情報を持たない、あるいはその情報を得る術を知らないということではないだろうか。だからこそ、日本語教育の重要な情報源である諸機関を結ぶ情報ネットワーク作りと、そのネットワークに誰でも自由にアクセスできるような体制作りが今必要とされているわけである。

今回私自身が痛感させられたことは、このネットワーク作りにいちばん遅れを取っているのは大学（お茶大の私ども）であろうということである。日本語教育・研究の数多くの成果を研究会（誌）や学会（誌）で公表してきたものの、ネットワーク上でその蓄積と発信をしようという努力はしてこなかった。

発表内容から分かるように、国際交流基金日本語国際センター、文化庁、お茶大、それぞれが蓄積する情報は、重要ではあるが異質なものである。しかし、異質な価値を持つからこそ、ネットワークを通じたその交流が必要になるのであり、ネットワークの果たす独自の役割も明らかにされよう。

今回の分科会がそのようなネットワーク作りの一歩になったかという問に対しては、異質情報ネットワークの必要性と重要性が浮き彫りにされたという点において、「一歩」と言わずとも「半歩」ぐらいにはなったのではないかと思う。今回の分科会は、ネットワークを通して共有できる異質情報がいかに豊富なものであるかを垣間みさせてくれるものでもあった。